大平正芳記念財団レポート

第33回「大平正芳記念賞」・第31回「学術研究助成費」贈呈式

平成29年6月12日（月）、財団合同役員会のあと正午から、300名の参会者のなか「第33回大平正芳記念賞」「第31回環太平洋学術研究助成費」の贈呈式が東京・一ツ橋の如水会館2階大ホールと中ホールで行われました。

受賞者の皆さんと大平知範理事長（前列中央）

贈呈式ははじめに、大平裕前理事長より財団の活動と平成29年度の各受賞者の紹介がありました。次に、大平知範新理事長の新任の挨拶があり、「大平正芳記念賞」を伊藤亜聖氏（東京大学社会科学研究所准教授）ほか4氏に贈りました。続いて受賞者を代表して伊藤亜聖氏が謝辞を述べられ、外務大臣・岸田文雄様の挨拶と東京大学教授・当財団運営・選定委員、川島真先生の挨拶と乾杯のあとパーティーに移り、各受賞者を交えて歓談に入り、盛況裡に午後2時過ぎお開きとなりました。

2017（平成29）年 9月発行

贈呈式より

大平裕前理事長挨拶

二言、三言、御礼のご挨拶を述べさせていただきます。本日は皆々様には大変、お忙しい中、如水会館までお越し賜り有難うございました。

特に本日は、外務大臣で宏池会会長でもあられます岸田文雄先生に公務多忙の折にもかかわりませず、御臨席を賜り、大変光栄に存じております。

大平財団は丸32年、本日で33年目に入ります。過去247名の若手研究者、学者に対し総額270百万円にのぼる賞金・助成金を供与し、内外の学界へのひとつの登竜門としての役割を果たして参ったのではないかと存じております。併せて、財団は大平正芳の自著、研究書を合計で21冊を一部英語、中国語を交えて出版して環太平洋構想の普及に努めて参りました。

地元、香川県観音寺市では、老朽化で閉鎖した大平正芳記念館の所蔵品を、政治関連文書は国会図書館に、いわゆる大平文庫8000冊は香川県立図書館に、そして、遺品・記念品は観音寺市に寄贈、観光センター内に新記念館が昨年11月５日

2017年6月12日に行われた贈呈式でのスピーチ
及び各受賞者から寄せられた謝辞を掲載します

にオープン致し、いずれも従来以上に公的貢献の場を得て、落ち着くところに落ち着いたという感じでおります。

なお、新記念館再開に際しましては、地元で「再設置募金発起人会」が結成され、過分のご支援を賜りましたが、首都圏でも、財団ゆかりの多くの皆様方、地元に遜色ない多額の浄財を賜りました。この場をお借りして心より御礼申し上げます。

さて、私の理事長職についてであります。午前中の理事会で一線を退き、常務理事の大平知範が後任として選出されました。私は若い頃より眼が悪く、ここ７～８年、白内障、緑内障の手術を受けておりますが、３ケ月毎の単位でみますと明らかに視力は悪化しており、理事会・評議員の皆様にお願いをいたした訳であります。

知範につきましては、まだまだ未熟者でありますこと十分承知しておりますが、ご出席の皆々様のご指導・お力添えを賜り、何とかやっていけるのではと思っております。

なお、本日、私の古代史研究の最新刊『天照大神は卑弥呼だった』がＰＨＰ研究所より発刊されました。お帰りの際、お持ちかえりいただきたいと存じますが、歴史に興味がおありの方には、大変面白い内容ではと思っております。

本日は、５名の方が大平正芳記念賞を受賞されます。先生方のこれまでの長い間のご研鑽に対し、心より尊敬いたしますと共に、今後のご精進を心よりお祈り申し上げて、ご挨拶とさせていただきます。

大平知範新理事長挨拶

本日、合同役員会にてご承認頂き、新しく理事長として就任させていただくことになりました大平知範でございます。ご参列頂いた皆々様、選考委員会の先生方、理事・評議員の方々を前にして緊張で、心の引きしまる思いでございます。

さて、新しい年度は大平正芳記念賞の選定と共に、リオープンされました観音寺の記念館運営委員会への参加、そして、北京外国語大学との共同事業として、中央大学教授の服部龍二先生による『大平正芳―理念と外交』を中国語に翻訳出版いたします。秋には出版会を予定いたし、出かけて参ります。

私ども財団も財政が厳しい折から倹約に努め、なんとかこれを乗り越えるため、皆々様からのご助言・ご提案もお受けしながら、新しい企画、新しい時代に合った事業の模索も含め粛々と歩みを進めていきたいと思っております。

初代の理事長は故・平岩外四様、次の大平裕、そしてこの私が三代目となりますが、32年続いている当財団を守り、精進していく所存でありますので、これまでと変わらず、ご指導・ご鞭撻を切にお願いいたします。

それでは、これより「大平正芳記念賞」の贈呈式にうつらせていただきます。受賞された５名の方々の業績につきましてはお手元のパンフレットに記載されておりますが、受賞された方々の多年のご研鑽に対し、深く敬意を表すものであります。

岸田文雄外務大臣の挨拶

ただ今ご紹介にあずかりました外務大臣の岸田文雄でございます。

大平正芳総理のご命日にあたる本日に開催されます大平正芳記念財団による大平正芳記念賞の授賞式にお招きにあずかりまして、大変光栄に思い心から感謝申し上げる次第でございます。大平財団におかれましては、先程大平裕会長からご紹介がありましたように大平知範新理事長のご就任、さらには地元におきましては新しい記念館がスタートされ、さらには大平裕会長の新しいご著書のご紹介がございました。こうしたご発展ぶりを心からお喜び申し上げます。

まず歴史と権威ある大平正芳記念賞をご受賞されました５人の先生方には心からお祝い申し上げる次第でございます。そして、今日はこの授賞式に当りまして、少しスピーチをするようにと仰せつかってまいりましたので、少しお時間をいただきお話しさせていただきたいと思います。

私は今、日本の国の外務大臣を４年半務めております。４年半の間に訪問した国の数だけでも実数50カ国を超えましたし、お会いした120の国の外務大臣と330回以上の外相会談を重ねてまいりました。それ以外にも、大統領ですとか、首相ですとか、王族ですとか、世界のいろいろな要人にお会いする機会をいただきました。

その中で度々大平正芳総理のご功績、足跡に触れさせていただく機会がございました。例えば、中南米に行きました時、たしかパナマには、街の真中にある道路ですが、ウィンストン・チャーチル通りと交差する形で、大平正芳通りという通りが存在するというのを記憶しています。またパナマやメキシコには、大平正芳総理の胸像・銅像があるということも承知しています。パナマの胸像につきましては、私は実際公園の小高い丘の頂に設置された胸像を拝見させていただきました。たしかそこに書かれた文字は伊東正義先生がお書きになられていたと記憶しています。

また、中国との関係においても先日中国の外交の最高責任者であります楊潔篪（よう・けつち）国務委員が訪日されました。その時の会談においても、さらには私は昨年春訪中いたしまして、李克強首相と会談する機会がありましたが、その会談の際にも大平正芳総理、そして宏池会の名前が出まして、たいへん話が盛り上がった、そのようなこともございました。

このように世界各地で大平正芳総理のご功績・足跡に触れる機会をいただいてきました。またさらに言いますと、外務大臣というのは国会答弁を行うに当たりまして、過去の外務大臣が行った答弁を引っ張り出してきて、延々と読みこなしていかなくてはなりません。

例えば、一昨年ですが、日本の国会における平和安全法制の議論、私は当時の中谷防衛大臣と二人で、衆参合わせて１国会だけで216時間延々と野党の質問に耐え続けたわけですが、その際に、野党は過去の政府の答弁との整合性と矛盾を延々と突いてくるわけです。そうしますと、私は過去の外務大臣を始め政府の答弁を、朝の４時、５時に起きて準備をしておかなければならないということがございました。その際に、大平正芳、当時の外務大臣の本当に緻密な、丁寧な答弁を、随分と読ませていただきました。人によっては、ずいぶん乱暴な答弁、こんなものでよく国会の答弁として通用したなというものもありますが、その中にありまして大平外務大

臣の答弁の緻密さ、丁寧さがまことに際立っていたと思いました。その中で、国会におきましては今でも条約審議に関する大平三原則など、大平外相が確立した外交における基本的な原則が延々と生きておりまして、今でもそういった原則に基づいてやり取りすることがございました。

このように４年半の間大平正芳総理の素晴らしい足跡、そしてお人柄に触れることがずいぶんあったわけですが、特に今年に入りまして、私は大平正芳総理の偉大さ、大きな存在感を、強く感じておりますところでございます。

例えば、日中関係を考えましても、今年は田中角栄総理、そして大平正芳外務大臣のもとで日中国交正常化して45周年であり、来年は日中平和友好条約締結40周年という大きな節目の年を迎えます。通常であれば今年の１月から記念行事がどんどん行われる、そうしたウキウキした雰囲気が感じられる筈でありますが、今年は中国におきましては５年に１度の中国共産党大会が開かれ、中国の人事が行われるということで、大変神経質な動きが続いています。

こうした中国共産党大会をはさんで、今先程申し上げました大きな節目の年を迎えている。また、今現在も神経質な動きが動いているわけですが、この中国共産党大会の後をにらんで、是非日中関係を前進させようということで、私も、今年２月、４月、すでに日中外相会談を２回行っています。先日楊潔篪国務委員も日本を訪問してやり取りがずーっと続いているというのが中国との有りようであります。

改めて、45年前、大平正芳外務大臣の下で、国交が正常化し、前進した日中関係に思いを巡らし、当時は今とは比べられない程大変厳しい条件の中で、本当に激しいやり取りが行われたのだと思います。そのことを考えれば、我々はもっと頑張らなければいけないと、こんな思いを持つわけでありますし、是非日中関係においてもこうした大きな節目をとらえて、大平総理をはじめ先人の皆様方の功績をさらに未来に向けて生かして行かなければならないと思うわけです。

同様に日韓関係につきましても、今年韓国におきまして新

しい政権がスタートしました。北朝鮮情勢等を考えますと、韓国との関係も大いに進めて行かなければならない。やはり、1965年、日韓国交正常化の前に、大平外務大臣が大変なご努力をなされた「大平・金メモ」などといわれる歴史的なやり取りが記録されているわけでありますが、あの時のご苦労に思いをめぐらしながら、この大切な日韓関係を進めて行かなければならないと、こんなことを感じています。

そして、大平総理のご功績、先人のご功績をしっかりと生かして行かなければならないと思うなかにあって、日中関係、日韓関係において私は今現在仕事をしている日本の外務大臣として大変心配していることもあります。その一つが、日本と中国と韓国、この３つの国の国民感情ということであります。この数年、この10年、20年をとりましても、日本人の中国や韓国に対する国民感情が際立って悪化しているというのが現実であります。

このことを私は大変心配に思っております。例えば、日中関係ということで考えるならば、これは1979年、日中平和友好条約締結の翌年の世論調査ですが、日本人で中国人に、中国の国に良い印象を持っていない人、悪い印象を持っている人の割合が、当時の調査で20パーセント程度でありました。ところが、2016年、昨年の調査でありますが、日本人で、中国に対して良い印象を持っていない人の割合は実に83パーセントに跳ね上がっています。

この大きな変化をどう考えるか。また、韓国との関係でいいますと、日本と韓国の間で、今度は質問の仕方が逆でして、日本人で韓国に対して良い印象を持っている人の割合は、2009年の調査では、63パーセントでありまして、2015年の調査では38パーセントに減っております。要するに、日本人の韓国に対する感情もかつてに比べるとかなり悪化しているという現実がございます。

中国や韓国の方々の日本に対する印象、これは過去の不幸な歴史、あるいは様々な経緯の中で、日本に対して大変厳しい見方をしている、あるいは複雑な思いを持っている、これ

を我々は充分理解しなければならないところですが、そちらの方は、最近のインバウンド・ブーム等を通じて、日本を訪問される方がどんどん増えていって、徐々に良い方向に向かっている。こういった現実があるなかにあって、日本人の中国や韓国に対する感情が悪化している。このことを我々はどう受け止めるのか、私は中国や韓国の外務大臣や要人に対して、こうした国民感情の変化に対して、どう対応するのか、これは両方が努力しなければ駄目だと、我々も努力するけれども、ぜひあなた方も努力してもらいたいと、こういった呼びかけをしているところです。

大平正芳総理をはじめ、先人の日中関係、日韓関係におけるご功績に対し改めて思いめぐらしながら、今を生きる我々として日中関係、日韓関係においては何をするべきなのか、これを政府はもちろんですが、あらゆる分野、あらゆるレベルで、ご活躍される多くの皆様と共にしっかりと考えてゆかねばならないのではないかと思います。

そして最後にもう一つだけ外務大臣として思うことを述べさせていただきます。今、世界はだいぶ不透明な時代を迎えています。自国第一主義、内向き志向などといわれて、先の見通しがたたないことが指摘されています。フランスの大統領選挙、韓国の大統領選挙、イギリスでの総選挙、これからドイツでの総選挙もありますし、中国の共産党大会もあります。こうした不透明ななかで、我々は何を一つの物指にして考えるべきなのか。一つは自由とか、民主主義とか、平和とか、法の支配といった我々が戦後大事にしてきた基本的な価値観を羅針盤としなければいけない。このことと、もう一つ強く思うことは、外交におけるバランスということであります。

日本の国においても、平和安全法制の議論、あるいは日米ガイドラインを１０数年ぶりに見直しを行いました。こうした取り組みを進める一方で、アメリカ現職大統領の広島訪問ですとか、日本の総理大臣の真珠湾訪問ですとか、慰安婦問題における日韓の合意ですとか、こうした和解をしっかり

と進めて行かなくてはならない。この両方があってこそ国民は外交に対する安心や理解を感じるのではないか。また、日本の国益を進めることと、世界のグローバルな課題に貢献すること、こういったことにおいてもバランスを考えなければならないと。

さらにはＡ国、Ｂ国は両方とも日本にとって大切な国である。ＡとＢの国が対立したとして、日本は両方の国との関係を進めて行かなくてはならない。こうしたバランスですとか、こうした不透明な時代だからこそ、外交においてバランスを考えなければなりません。その際に、大平正芳総理が思索を深めておられました「楕円の哲学」ですとか、「永遠の今」ですとか、こうした様々な厳しい対立の中で、ひとつのバランスを考えて行くああいった深い思索の重みを改めて感じるところです。不透明な時代において、バランスという意味においても、大平総理の深いご思索、あるいはご功績に思いをめぐらすところでございます。

以上、今日の記念賞授賞式に当りまして、今外務大臣を務めております身として、改めて大平正芳総理のご功績に思いをめぐらさせて頂いていることをご紹介させていただきました。

是非大平正芳財団におかれましても、今後また一層のご発展をなされますことをお祈り申しあげますし、またご列席の皆様方の一層のご活躍とご健勝をご祈念申し上げまして、今日のスピーチとさせていただきます。まことに有難うございました。

川島　真先生の挨拶と乾杯

ご紹介をいただきました川島でございます。

手元の冊子の最後のページに運営・選定委員会の名簿がございます。本来であればそちらにいらっしゃる末廣昭委員長がご挨拶申し上げるところ、ご指名でございますので私がご挨拶申し上げます。

財団からは10分間で米中関係、一帯一路について話をするようにというところですが、10分間ではとうてい無理な話ですので、手短に話を進めたいと思います。

私自身は、駒場（東京大学）で中国外交史、国際関係史を教えている者でございますが、まずは、選定委員として、また研究者として、受賞者の皆様にお祝いを申し上げたいと思います。おめでとうございます。

研究者に取りまして、研究というのは孤独な戦いでありまして、先程伊藤先生（受賞者）が切磋琢磨していくという話をしておられました。それもその通りなのですが、最終的には個人の孤独な戦いであります。研究が現状と深い関わりをもつということは大事なのですが、情勢は動いておりますし、博士論文には最低10年ぐらいかかりますので、その都度その都度テーマを変えてはきりがないので、社会と向き合い

ながら、そこから影響・刺激を受けながらじっと机の上でテーマを練り上げ、問題意識を練り上げていくということが求められています。そうした、孤独な戦いの成果たる研究に対して賞を与え、励まして下さる財団に対して心から敬意を表したく思います。

私個人的には、大平先生と深い関わりがあるところはございません。ただ、一件だけ、先程新理事長から北京外国語大学の話がございましたが、実は大平学校なるものが北京外国語大学にございました。いま大臣（岸田外務大臣）からお話がございましたが、1979年に大平総理が訪中いたしまして、新しいＯＤＡを決めていくのですが、そこに実は中国の日本語教師研修という新しいプロジェクトが含まれていました。そのプロジェクトで、合計590数名だとお思いますが、彼ら／彼女らが研修を５年間行いました。そのプロジェクトに加わった方々が大平班（グループ）と呼ばれ、またその研修の場が大平学校と呼ばれました。その人たちが現在の中国の日本研究を支えている方々でありまして、その研修プロジェクトが終わってから、それを継続的に残す目的でできたのが北京外国語大学にある「北京日本学研究センター」というところでありました。今そこには大平先生の文庫、あるいは展示カウンター等があります。私はそこに2000年～2001年の２年間副主任として赴任していました。このセンターと大平財団との協定文書の下書きをしていたことを思い出します。また、協定締結後に、このセンターの新たな建物のどこに大平先生の文庫を配置するかを決めたりしていたことを思い出し、多少のご縁があったのかと思っているところでございます。

今日は、米中関係、日中関係、一帯一路についての話ということですが、やはりその件に関して触れる必要があるのは、大平先生の提起された「環太平洋構想」だと思います。中国の学界、中国の日本研究の世界から見ますと、やはり先程から話していますように、大平先生は日中国交正常化の立役者としての評価があるのですが、昨今は中国でも大平先生の

「環太平洋構想」が急速に注目されてきているということでございます。

それは何故かといいますと、中国自身がそのような、地域的といいますか、アジア太平洋地域構想をつくろうとしていることがあります。そのような地域構想を打ち出さなければならないと考えて、その際に大平先生の構想を参考にしているのでしょう。なぜ中国が地域構想を描こうとしているのでしょうか。それは、一帯一路にかかわることなのでありますが、やはり中国が地域大国として、またグローバル大国として、自分なりの秩序感というものを世界に示す必要があると考え出したのだと思います。

胡錦濤政権期に、中国は大国外交、周辺外交、あるいはマルチ外交と、いくつか外交ジャンルをつくって行きました。また、胡錦濤政権後半期にだんだんと南シナ海等々などで強硬な方向に転換して行くわけですが、習近平政権は、そういう胡錦濤政権期の方向性を継続しながらも、やはりいくつかの面で胡錦濤政権とは違う政策を見せ始めているのです。

ひとつは、言葉の上では、今、鄧小平以来の「韜光養晦」という、日本語では「能ある鷹は爪を隠す」といいますが、その経済重視の協調外交を意味するスローガンを胡錦濤はずっと使ったわけでありますが、その言葉を習近平は一切使わないのです。また実際の行動では、南シナ海では、習近平は基地を作りだしました。そして、これは大きな違いですが、胡錦濤の時期には周辺との外交、つまり中国と国境を接する国々とのあいだとの外交において、自ら主導性を握っていくということをやったのですが、習近平はそこを越えてゆこうとしているのです。つまりは一帯一路、ユーラシアとかインド洋のほうへぬけていく海の道をつくることを想定しながら、その空間においてAIIBですとか、宇宙衛星システムでありますとか、新たな国際公共財や、アジア新安全保障観などといった新しい地域像を打ち出そうとしているわけでございます。

この習近平政権の新たな施策に対しまして、オバマ大統領

がつくってきたマルチな枠組み、例えばTPPでありますとか、安全保障のネットワークといった、いわゆるリバランスという言葉で言われる政策とが対峙しているような状態になりました。オバマ大統領の対外政策は、しばしば批判されますが、東アジアの、あるいはアジア太平洋地域におきましても、フィリピンにしても、マルチな安全保障ネットワークにしても、非常に強い刺激を中国に与えたと思われます。中国の場合は同盟国を持たない独立自主の外交を採用していますので、そういったネットワークの形成は、自らが包囲されているように、中国から見えたかもしれません。

ただそれが、トランプ政権になってTPPからの撤退もありますし、マルチの安全保障のネットワークよりも、二国間安全保障を重視するようになったように見えます。もちろん、先般のシャングリラ（シャングリラ・ダイアローグ）でマティス（米・国防長官）さんがマルチな安全保障関係の重要性を随分提唱したようではありますが、トランプ政権全体としてどうかは未知数です。目下、同盟国間のネットワークは、中国から見れば非常に強い関心事になっております。そこが今後の米中関係の大きな問題になると思いますし、また中国としては自らの秩序感、あるいは新しいまわりの国々との関係性をどのように見せるか問われるところです。

そういうなかで、先程伊藤先生からお話がありましたけれども、伊藤先生の研究は、最近は深圳をフィールドにしておられますが、世界の経済に中国がどう結び付くかということを、まさに最先端の部分でみておられます。中国経済はある種アイディアといいますかイノベーションが弱いといわれていたことがありますが、必ずしもそうではない、非常にビビットな姿を見せているところがあります。

また渡辺先生（受賞者）のご研究は大国アメリカの内側、まさに大国の複雑さ、多様さを、選挙研究を通じて描き出すことに成功したわけです。民主主義の最前線といったところだと思います。

そして、国際政治には日米、米ソといった大国間関係だけ

では済まないさまざまなサブシステムがある中で、スポーツの観点から東洋、東洋ボクシングを、フィリピンの存在から描いた乗松先生（受賞者）の著作は、非常に刺激的でございました。

さらに、沈志華先生（受賞者）の研究はこれもまた大きな研究でありまして、中朝関係について「血の同盟」関係は本当にあるのかということを根本的に問い直す、そういうものになっているわけでございます。

最後に、地域構想を考えるさいには、先程大臣（岸田外務大臣）からお話がありましたように、リコンシリエーション、和解ということが大変重要となってきています。今年は、日中国交正常化45周年の年であると同時に、実は「盧溝橋事件」の80周年であるわけです。その点、櫻井先生（受賞者）が描かれた「華北駐屯軍」の話は、なぜそこ（盧溝橋）に日本軍がいるのか、どういう目的で置かれているのか、こういったことを明らかにしています。これは和解をするための第一歩となる事実把握としてきわめて重要なことです。

そうした意味での先生方の業績というものは、非常に学問的ではありますが、現在の事態にマッチしているわけで、先生方の問題関心事に現実が追いついたともいえますし、あるいは現実とは距離をとりながらも、やはりそういった研究が結果的には現実と深い関わりを持ったともいえましょう。いずれにしましても、評価を担当した者として、いずれの皆様にも、専門書は手強いかもしれませんが、ぜひこれらの本を手にとって、お読みいただければと思うところでございます。

各著者の皆さまの受賞をお祝いし、また大平正芳記念財団の今後のますますの発展をお祈りいたしまして乾杯したいと思います。乾杯。

大平正芳記念財団 ― 合同役員会

（如水会館）

大平裕前理事長の報告。左に真鍋賢二監事

合同役員会で「第 33 回大平正芳記念賞」の受賞者の皆さんが紹介されました

●運営・選定委員

委員長・末廣昭

委員・青山和佳／金子芳樹／川島真／
木村福成／久保文明／黒崎卓

受賞者謝辞

〔大平正芳記念賞〕

受賞作

『現代中国の産業集積
―「世界の工場」とボトムアップ型経済発展』

伊藤（いとう）　亜聖（あせい）
（東京大学社会科学研究所准教授）

ただいまご紹介に預かりました、伊藤亜聖と申します。このたび、大平正芳記念賞を受賞できましたこと、身に余る光栄です。心より御礼を申し上げます。大平正芳の名前を冠するこの賞は、アジア太平洋地域を研究するものにとっての目標であります。

また、このたび櫻井良樹先生の『華北駐屯日本軍』、乗松優先生の『ボクシングと大東亜』、渡辺将人先生の『現代アメリカ選挙の変貌』、そして沈志華先生の『最後の「天朝」』、これらのご著作に、私の著書が並んでいることは何にも勝る栄誉です。

●大平、そして鄧小平

今日、6月12日は大平正芳の37回目の命日にあたります。中国そしてアジアを研究するものとして、大平が戦前の興亜院時代から中国大陸に駐在し、また1972年には日中国交正常

化交渉の過程で、果たした役割がまず頭に浮かびます。大学では現代中国論を講じることもありますが、その際には必ず当時の大平外相と姫鵬飛外相との交渉を紹介しています。

また中国経済を研究するものとして想起するのは、中国の改革開放政策の牽引者・鄧小平と、大平正芳との関わりです。1978年10月24日に鄧小平が来日した際の面会から、大平が死去する1980年6月12日まで、わずか、1年半の間に、大平と鄧小平は合計4回の会談があったそうです。その中で、大平は環太平洋構想を、鄧小平は中国の現代化、より具体的には「小康社会」、すなわち「少しゆとりのある社会」を目指すことを語りました。およそ40年前の出来事になりますが、環太平洋構想はまさに経済統合や貿易協定として現在まで活発な議論がなされ、中国の現代化は世界第二位の経済大国として実現しつつあります。

●2018年に向けて

来年、2018年はいくつかの節目でもあります。一つは、1978年に始動した、鄧小平がけん引した中国の改革開放政策の40周年にあたります。鄧小平が目指した「少しゆとりのある社会」はほぼ実現しつつあるように見えます。私は今年度、中国広東省の深圳市に滞在して研究をしております。まさに改革開放政策の実験地として、経済特区に最初に指定された地です。かつては下請け工場というイメージでしたが、現在では通信機器の HUAWEI、メッセージアプリの Tencent、ドローンの DJI をはじめとする名だたるハイテク企業の本社が集中し、また日常のほぼすべての買い物は、電子決済化しています。かの地から、世界に打って出る若き民営企業が生まれています。こうした激変の時こそ、大平がそうであったように、大きな構想や地図、パースペクティブが求められている、このよう指摘することはできるでしょう。

●未来に向けて

大平正芳記念賞の受賞に際し、大平の人柄と努力、直観と構想、夢とその挫折に触れる機会を得たことに、感謝したいと思います。この受賞を励みに、自分もまた、想像力を豊か

にして、議論の幅を広げ、また努力して、新しいテーマに取り組みたいと考えております。

最後になりましたが、このような学術書籍の出版に際しては、ご指導を賜った多くの先生方、そして互いに未来の見えぬ中で切磋琢磨してきた友人たちに深く感謝したいと思います。そしてさらに各出版社の担当者の皆様には、締め切りぎりぎりまでの編集作業をしていただいたことにも感謝申し上げます。今後もかわらぬご支援をお願いして、謝辞に代えさせていただきます。本日はありがとうございました。

受賞作

『華北駐屯日本軍—義和団から盧溝橋への道』

櫻井（さくらい）　良樹（りょうじゅ）
（麗澤大学外国語学部教授）

このたびは、思いもしなかった大平正芳記念賞をいただき、たいへんありがたく、また感謝申し上げます。50歳未満という選考基準を知り、何かの間違いかと何度も確かめました。

本書では、義和団事件をきっかけに1901年に設けられた清国駐屯軍（支那駐屯軍）の、設置から盧溝橋事件後の廃止に至るまでの歴史を初めて本格的に扱いました。それを中国国内情勢の変化（辛亥革命、中国内戦）や国際情勢の変化（第一次世界大戦、満洲事変）、日本の変化との関係で明らかにしました。また各国の駐屯軍の状況と変化についても、可能な限り明らかにしました。

本書の持つユニークな点は、駐屯軍が単なる邦人保護・居留地防衛を目的とするものではなく、現地の秩序維持を担う国際軍的性格と機能を持っていたことについて注目し、その変化を織り込みながら著述した点にあると考えます。日本軍は、はじめは国際協調につとめ突出した行動をとらなかったのですが、1930年代から性格をしだいに変化させていく様

相が明らかになりました。これは同時に中国という場における列強諸国による外交団による協調体制（北京議定書システム）が、ワシントン体制期を経て機能しなくなり、やがて崩壊していったことを、駐屯軍という側面から描いたことを意味するものです。

本書は純粋な歴史研究ですが、そこに現代的な意義があるとすれば、それは世界各地での紛争や社会の混乱に際して、人道的支援や平和維持の名のもとに軍隊派遣がなされている現状を考える時、戦うことを目的にしなくても生じてくる様々な作用や変化を、この過去の事例からすくい取ることができるということだと思います。

最後に、これまで政治史の細かい実証研究を中心にしてきた私にとって、この本の構図は多少冒険的なものでした。このような発表の場所を提供してくださった岩波書店、そして本賞を与えてくださった選定委員・大平財団の皆様そして私を育ててくださった諸先輩方に厚く御礼申し上げます。

受賞作

『ボクシングと大東亜 ―東洋選手権と戦後アジア外交』

乗松（のりまつ） 優（すぐる）
（関東学院大学兼任講師）

このたびは、大平正芳記念賞を賜り、大変光栄に存じます。数多く寄せられた珠玉の作品から、本作の意義を見出してくださり、感謝の念に堪えません。貴財団並びに理事会の皆さま、運営・選定委員の先生方に心よりお礼申し上げます。贈呈式があった6月12日は、故・大平正芳元首相のご命日であり、フィリピンの独立記念日でした。1952年の東洋選手権から優に半世紀以上が経っているにもかかわらず、戦後のスポーツ交流がこのような形で再び注目されることに不思議な縁を感じます。

『ボクシングと大東亜一東洋選手権と戦後アジア外交』は、

戦争によって徹底的に破壊された日本―フィリピン間の正常な関係をボクサーたちが裸一貫で回復する物語です。この作品について、来賓者の皆さまから身に余るほどのお褒めの言葉を頂きました。しかし、私は多くのボクシング関係者の理解と協力を得て、彼ら／彼女らが語る言葉に耳を傾けたに過ぎません。本作は、私の力だけで書き上げたものではありません。今回の受賞は、ボクシングを通して日比両国の関係改善に陰ながら尽力した全ての人間の生が学術的にその価値を認められたものです。

アジア諸国間で政治的な緊張が高まる昨今、私たちはこれまで以上に国内外の＜隣人＞について理解する必要があります。ボクシング東洋選手権は、外交が膠着状態の中でも、対話のドアは常に開かれていることを示しました。私たちが、競技の枠組みだけでスポーツを捉えようとする固定観念から解放されれば、スポーツはこれまで看過されてきた多くの歴史的事実や解釈をもたらしてくれるでしょう。私は、それこそがスポーツの公益性であると考えます。私のささやかな取り組みが、新たな学問的アプローチの可能性を開くと共に、国際理解の一助となることを心より願います。

受賞作

『現代アメリカ選挙の変貌 ―アウトリーチ・政党・デモクラシー』

渡辺（わたなべ）　将人（まさひと）
（北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院准教授）

このたびは、名誉ある大平正芳記念賞を賜り、誠に光栄に存じます。運営・選定委員の諸先生、財団関係者の皆様、本書執筆にあたりご指導下さった方々、アメリカでの現地調査にご協力下さった方、出版にお力添え下さった方など、すべての皆様に深くお礼申し上げます。

本書は、人種、民族、信仰、イデオロギー、地域などによって分断された「個別のアメリカ」と「統合的なアメリカ」の相互

作用の実態を選挙過程から探ることを目的としています。選挙は政党や候補者が票を無心する機会ですが、他方で個別集団にとっては票と引き換えに自己主張する好機でもあります。活動家の政党への参与は、周辺的存在である彼らを主流に溶け込ませる包摂の営みでもありました。

こうした問題意識を踏まえ、本書は現代アメリカの政党と候補者が個別の選挙民集団にアウトリーチを展開する過程を分析したものです。とりわけ2000年代以降、アメリカではオンライン技術の進歩が「地上戦」の効果を再有効化し、従来のメディア戦略では糾合しにくかった争点志向の活動家を予備選挙、全国党大会、政権運営など異なる段階で活性化させました。固定的な人間関係に依拠していたかつての「マシーン」の代替として新たな「コミュニケーション空間」が形成されているとすれば、1970年代以降の「候補者中心選挙」「政党衰退論」の修正が必要であると考え、アメリカの政党をめぐる新たな構造概念の提示を試みました。

選挙民集団別のアイデンティティと利益に訴えかけるアウトリーチには、分極化の促進という側面も介在し、デモクラシーの進展と分断の両義性が潜んでいることも否定できません。それだけに選挙における集票過程の分析は、アメリカ社会の変容を多面的に捉える作業と深く連動していると認識しており、残された課題の大きさを感じております。このたびの受賞を継続的な研究の励みとさせていただきたく存じます。

特別賞

『最後の「天朝」
—毛沢東・金日成時代の中国と北朝鮮』

沈　志華（しん　しか）
（華東師範大学歴史学部終身教授）

拙著『最後の「天朝」—毛沢東・金日成時代の中国と北朝鮮』（上、下巻、朱建栄訳、岩波書店、2016年9月）が公益財団法人大

平正芳記念財団より「大平正芳記念賞特別賞」が授与されたとの一報に接し、とても光栄であり、非常に喜びを感じています。

私はかなり前より、大平正芳元総理が生前、中日関係の発展において行った多大な貢献に敬意を表しており、記念財団は「環太平洋連帯構想」ないしアジア地域の一体化に関する理念の普及を促進する一環としてこの記念賞事業を推進しておられることにも心より賛同します。

拙著はまず日本語版が出ることになりましたが、続いて韓国語版、香港で中国語版を出版する予定であります。(注：韓国語版と繁体字中国語版はそれぞれ半年以上遅れて2017年夏に出ました) 本研究の日本語による世界初出版を注目していただき、高い評価をいただいたことに、自分としても深謝の意を表したいと存じます。

拙著は、長年発掘し続けた中国やロシア、アメリカなど各国の外交公文書に散在する関係資料を整理、考証したうえで、1920年代から中国の改革開放政策が始まる前に至るまでの中国と朝鮮との関係における紆余曲折に満ちた変化の過程を再検証し、再構成したものです。この作業を通じて、中朝関係の真実を、朝鮮は中国の「兄弟国家」であり、中国との間に鮮血で凝結された戦いの友情があるという「歴史的神話」から解放され、誤った認識や誤解、ステレオタイプの概念が打破されるのに、一定の役割を果たしたと評価されるとすれば幸いに思います。朝鮮の行動と変局はもはや中国が今、応対すべきもっとも重要な国際問題の一つになっており、このタイミングで出版した拙著は、中国が朝鮮問題に関する歴史的重荷を積み下ろし、半島の行方に関するより視野の広い、より多くの政策的選択肢を見つけるのに少し役立つことにも期待しています。

現在、私は上海の華東師範大学で周辺国家研究院を主宰しています。今回の受賞をきっかけに、日本の学界の友人と交流のパイプを広げ、中日両国間の相互理解と協力の促進に努めてまいりたい所存です。

●贈呈式及び記念パーティーより（如水会館・2階大ホール）

大平知範理事長、川島真氏、大平裕氏、岸田文雄外務大臣―左より

泰道三八氏、津島雄二氏、真鍋賢二氏、岸田文雄外務大臣、福川伸次氏―左より

渡辺将人氏、久保文明氏、清原聖子氏―左より

木村福成氏、伊藤亜聖氏、上原正子氏、伊藤亜聖氏ご家族（奥様と子供さん、ご両親、義母様）―左より

岡本厚氏、朱建栄氏、林建朗氏―左より

乗松康子氏、乗松賢交氏、乗松優氏、藤村興明氏―左より

鎌谷妙子氏、馬渕麗子氏、馬渕喬氏、鈴木岩男氏—左より

湯下文子氏、大平公子氏、大平吉子氏、湯下博之氏、大平明氏—左から

上山和雄氏、吉良芳恵氏、櫻井良樹氏、黒澤文貴氏—左から

青山和佳氏、伊藤亜聖氏、毛里和子氏、遠藤環氏―左から

齊田晴一氏、清原武彦氏、小倉純二氏―左から

小川武一郎氏、渡辺満子氏、大平知範理事長、山本益世氏、岸田文雄外務大臣、秋山正子氏、高見俊一氏―左から

加藤健治氏、笛田昭紘氏、小倉純二氏、大平裕氏、穐田宏氏、清水亮氏—左から

柳川邦衛氏、王敏氏、狩野裕子氏、鈴木岩男氏、稲田直樹氏—左から

遠藤環氏、末廣昭氏、三木信吾氏—左から

風信・来信

●大平正芳記念賞受賞者が共同で翻訳

ナイラ・カビール著（遠藤環・青山和佳・韓載香訳『選択する力：バングラデシュ人女性によるロンドンとダッカの労働市場における意思決定』発刊。ロンドンスクールオブエコノミクス（LSE）のカビール教授の主著であり、ジェンダーと開発／労働、移民研究、都市の階層研究の古典を遠藤氏（第28回受賞者）、青山氏（第23回受賞者）が翻訳。原著者自身が研究史を振り返る講演録と最新動向を含めた訳者解説を付し、現代的な示唆も持つ一冊に。

●編集・寄稿・翻訳など、年内には新著を刊行予定

特集「グローバル・アジアにみる市民社会と国家の間：危機とその克服」『地域研究』15-1（京都大学 CIAS、2015年）の編集・執筆。堀本武功編『現代日印関係入門』（東京大学出版会、2017年）に第13章「権力移行期の世界における日印関係の創造的可能性」を寄稿。インドを代表する知識人ラナジット・グハ『世界史の脱構築：ヘーゲルの歴史哲学批判からタゴールの詩の思想へ』（立教大学出版会、2017年3月）を翻訳・出版。（竹中千春・立教大学法学部教授、第27回大平正芳記念賞受賞者）

●東南アジアの ICT 化の光と影

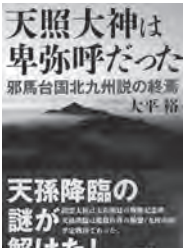
昨年度、栄誉ある大平正芳記念賞を受賞させていただいた著書のテーマは、インドネシアにおける政治と暴力でしたが、最近は、東南アジアにおける ICT 化のインパクトに関心を抱いています。日本では AI が仕事を奪う可能性が話題によくのぼります。或いは、トランプ大統領のツイッターが象徴するように、オンライン時代の到来はポスト・トゥルースの時代でもあります。東南アジアでは人口の53%（2017年1月現在）がインターネットにアクセスしており、ICT 化のインパクトは広範です。政治においてもポスト・トゥルース現象が目立ち始めました。一方で、ICT 化は住民参加を促しています。最近は、こうした ICT 化の光と影の両側面についての調査をはじめました。（岡本正明・京都大学東南アジア研究所准教授、第32回大平正芳記念賞受賞者）

●20年間のインド村落社会の変化

昨年、環太平洋学術研究助成費をいただき、南インドの芸能的儀礼と社会についての本の出版が実現することとなりました。

今年初め、最終調査から10年以上たった現在の村の状況を見てまいりました。若い世代は都市部や湾岸諸国へ移住し、生活水準が向上している一方で、伝統的な祭儀や家に対する帰属意識は高まっているようです。インド社会の大きな変化と、変わらない点などをみて、改めて伝統と近代の拮抗と創造というダイナミズムの中で、人々の生活と文化は生成されていることを確認いたしました。今後も、インドの宗教文化に関わる人々の生活に注目し、グローバルでかつ地域的なヒンドゥーイムズのあり方を追い求めたいと思います(古賀万由里・開智国際大学国際教養学部講師、第30回環太平洋学術研究助成費受賞者)。

●大平裕著『天照大神は卑弥呼だった
―邪馬台国北九州説の終焉』(PHP 研究所)



中国の史書『魏志倭人伝』が伝える情報と、『日本書紀』神代記が伝える情報を交差させながら、「天孫降臨」を主題にわが国の成り立ちと、古代史いちばんの人気テーマ「卑弥呼」の謎に挑戦する一冊。『魏志倭人伝』の伝える女王卑弥呼は、我々の祖先が長い間語り継ぎ、敬ってきた女神・民族の神、皇室の祖先神である天照大神(あまてらすおおみかみ) です。出雲大社は邪馬台国(やまと国＝大和朝廷) の戦勝記念碑であり、天孫降臨は瓊瓊杵尊 (ににぎのみこと) の熊襲 (九州南部) 平定物語であった。邪馬台国北九州説は崩壊します。

●黒崎卓・山形辰史『開発経済学：貧困削減へのアプローチ、
増補改訂版』日本評論社、2017年3月刊

開発の現場で役立つ開発経済学のテキストとして、多くの読者層を得ることができた2003年刊の旧版を刷新した新版です。ランダム化比較実験(RCT) や行動経済学的知見、持続可能な開発目標 (SDGs) などの最新の手法をカバーしました。

● Kurosaki, Takashi, Comparative Economic Development in India, Pakistan, and Bangladesh: Agriculture in the 20th Century, Maruzen Publishers. 2017年2月刊。

20世紀初めからの約100年という長期間を対象に、インド、パキスタン、バングラデシュの農業発展を国、県、農家という様々な単

位で比較研究した成果を取りまとめた英文の研究書です。1947年に突然ひかれた国境によって分断された英領インド帝国の農業が、その後どのように変化したのかを独立前と比較しています。

●『大平正芳―理念と外交』中国語翻訳版、今秋発刊予定

服部龍二・中央大学教授著『大平正芳―理念と外交』（岩波書店）が日本学術名著翻訳事業（中国語に翻訳し、中国国内で教材として活用する事業）として今秋に発刊される予定です。11月に行われる北京日本学研究センター・日本語優秀学位論文の授賞式に合わせて発刊式を行う予定です。

●岸田文雄外務大臣が大平総理のお墓参りと記念館見学

さる7月22日、岸田外務大臣が観音寺市にある、大平総理のお墓参りの後、記念館に来られ、白川観音寺市長、横山三豊市長をはじめ関係者が出迎えました。香川出身の国会議員の方々も見えられ、知範理事長と記念館関係者の説明のもと熱心に見学されました。

▶岸田文雄外務大臣と香川県選出の国会議員の皆様

●大平正芳記念財団へのご寄付者名

【150万円】三木証券(株)（鈴木崇）様、【100万円】馬渕隆一様、(株)桃李（齊田晴一）様、(株)アリエ（石橋雄三、奈央子）様、【50万円】(株)タカ・コーポレーション（馬渕喬）様、讃岐罐詰(株)（大西征四郎）様、鈴木岩男様、【10万円】かんべ土地建物(株)（神戸三元）様、丸善工業(株)（三谷朋幹）様、清水範男様、この他７名の個人・団体の方々より御芳志をいただきました。

（順不同、平成28年9月～平成29年8月）

Printed in Japan 2017 ©

「大平正芳記念財団レポート」第 35 号
発行・公益財団法人大平正芳記念財団
発行人・大平　知範

2017（平成 29）年 9 月発行
〒 102-0082 東京都千代田区一番町 22 － 4 一番町館 1F
電話（03）3230 － 2213　FAX.（03）3230 － 2214
URL：http://www.ohira.org/

THE MASAYOSHI OHIRA MEMORIAL FOUNDATION

Ichibancho-Kan 1F
22-4, Ichibancho, Chiyoda-Ku, Tokyo,
102-0082 JAPAN
Tel. +81(Japan)3-3230-2213
Fax. +81(Japan)3-3230-2214
URL:http://www.ohira.org/